

## 令和2年度の研究(または活動)内容

### (1) 令和元年度に実施したアンケートの分析とその一部の成果発表

Well-being 研究所を発足した令和元年度に実施したアンケート調査の結果の詳細な分析を行い、その結果の一部を東北工業大学地域連携センター、研究支援センター紀要(EOS)にて発表した。この調査の概要および調査結果(一部 EOS の内容と重複)を報告する。

#### (調査概要)

調査目的: 価値観(労働、人生、金銭など)と主観的幸福度との関連を検討する。259名(各年代ごとの人数は表1参照)。

表1 調査対象者の年代別人数

|    | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60歳以上 | 計   |
|----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 男性 | 28  | 29  | 23  | 26  | 28    | 134 |
| 女性 | 28  | 24  | 27  | 19  | 27    | 125 |
| 計  | 56  | 53  | 50  | 45  | 55    | 259 |

調査日程: 2020年3月17日～3月24日

調査協力者: 20代、30代、40代、50代、60代以上、以上5つの年代について50名程度、計

調査方法: インターネットによるアンケート調査

調査内容: アンケート項目については、全67項目であった。具体的には、主観的幸福尺度(15項目)(伊藤ら(2003))、労働価値観尺度(21項目)(江口ら(2009))、職業観に関する質問(10項目)、金銭的価値観(6項目)、人生観に関する質問(11項目)、コミュニケーションに関する質問(4項目)であった。このうち、主観的幸福尺度と労働価値観尺度以外の4種類の質問項目については、今回の調査独自のものであった(表2参照)。

|           |   |
|-----------|---|
| 職業観       | <ul style="list-style-type: none"><li>・仕事をする上でワークライフバランスを重視している</li><li>・自分のキャリアについて、これまでの知識や経験を蓄積してきたと思う</li><li>・働き方の多様化・働き方改革については関心が高く歓迎する</li><li>・自分(能力・経験・指向性)と仕事のミスマッチによる違和感がある</li></ul> |
| 人生観       | <ul style="list-style-type: none"><li>・はっきりしないときでも、ふだん私はもっともよいことを期待している</li><li>・私は自分の将来についていつも楽観的である。</li><li>・私はものごとが自分の思い通りにいくとはほとんど思っていない</li><li>・良いことが私に起こるなんてほとんどあてにならない</li></ul>         |
| コミュニケーション | <ul style="list-style-type: none"><li>・コミュニケーションは得意な方ですか</li><li>・日常生活において他者とのコミュニケーションに満足していますか</li><li>・人と比べて他者とコミュニケーションをとる頻度が多い方だと感じていますか</li></ul>   |

|            |   |
|------------|---|
| <p>金銭観</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・今後の人生で、他の人よりも多い所得を得る自信がある</li> <li>・苦勞するがそれなりのお金がもらえる人生よりも、苦勞はしないでぎりぎり食べていける人生を送りたいと思う</li> <li>・いまの日本では、実は結構安いお金で、みじめではない暮らしができるので、そんなに頑張る必要はない</li> </ul> |
|------------|---|

(調査で示された結果の一部)

- ・労働価値観尺度の得点と主観的幸福度得点との間に有意な相関がみられた。年代別に分析すると、20代、50代、60歳以上の年代で有意な相関がみられたものの、30代、40代では有意な相関がみられなかった。つまり、20代、50代60歳以上は、仕事に対して様々な目的意識をその目的意識が高い人ほど、主観的幸福度が高いことが示された。

- ・20代は、主観的幸福度全体では他の世代とあまり変わらないが、失望感については他の世代よりも強く感じていることが示された。

- ・20代は、他の世代に比べ、労働に対して、「社会的評価」や「所属組織への貢献」を求めていることが示された。

- ・主観的幸福度と労働価値観尺度の両指標とも男女で得点の差は見られなかった。

## (2) 参与観察および質的調査の準備

2016年から5年間に渡って研究員の一人が地域コミュニティでヨガを教えて来た。ヨガの参与観察を継続しながら、今回は3年以上通っている複数の人たちにインタビュー調査を実施すべく、質問項目を精査している。活動の初期段階(1年目)に実施したアンケート結果と比較しながら、継続して通ってきている人たちの心的変化、幸福度についての変化等を、コミュニケーション的側面も含めて検討する予定である。特に2020年度はコロナ禍で感染の不安もあって参加人数が減っただけでなく、参加する年齢層が若くなった、という変化が見られた。また、社会的な恐怖・不安だけでなく、直接の対面コミュニケーションの場が減って生活面での変化もあったと推察される。その中であって、ヨガに通い続けてきている人たちに質的調査を実施することで、心理的、コミュニケーション的側面および心身の健康といった well-being との関連も含めて、幸福感について検討を試みるために、調査の準備中である。